

巻頭言

「軌道に乗る」ということ

日本作業療法教育研究会 副会長
山田 孝

平成8年の初夏に創設されたこの研究会は、その前の2年間を準備に費やしてきた。会長の矢谷令子先生の「石橋を叩いても渡らない」というような慎重に事を進めるやり方に、戸惑いを感じながら、長年に渡り作業療法教育にご尽力して来られている先生の、少しでもお役に立つことができばという思いで、付いてきたような気がする。集まった会員の34名が少なかったかどうかは別にしても、こうした組織が作業療法協会の外側に作られたことは、専門職団体の考える教育のあり方とは必ずしも一致しない点があるという可能性を秘めているという点で、それなりの意義があると思う。

こうして創設された本研究会も、はや6年目を迎えようとしている。会員は140名を越え、学術集会も盛況になった。また、昨年春から、研修会も開催されるようになった。教育目標を明確に立てて学生に示しながら、講義や教室内実習を行い、学生からの意見を聞くという教育のあるべき形を追求するという目的の1つも、ようやく端緒に着いたばかりのような気がする。しかし、6年という歳月は無駄であろうはずはなく、これまでの蓄積が有形無形で自分の中にこれまでになかった行動を引き起こしていることに気づいた。教育目標を今までよりも明確にし、学生に示している自分に気づいた。また、講義のはじめに、これまでは単に「前回の講義でわからなかったことはありませんか」と言う代わりに、矢谷先生にご紹介いただいた Minute Paper をワープロで作成して学生に記入してもらい、次の講義の開始時に「この点がわからなかった」と書いた学生に、「他の人もそう思っているんだよ」と言いながら、再度、詳しく説明をしている自分を見ている。

こうしたことは、この研究会でこれまでに仕入れてきた事柄であり、それが自分の講義に生かすことができるようになっている。研究会が「軌道に乗った」ことを示していると思う。「作業療法研究法」の講義を学生と一緒に聴講してくれている本学の若い先生方が、「授業評価に山田が使っているものを使いたいのですが、よろしいですか」と言ってくれたときには、これは作業療法教育研究会で矢谷先生から仕入れたものですよとっておけば、この研究会に対する注目度が上がったのにと、後悔している。

教育の成果を見るには長い年月がかかると言われる。学生がどんなふう to 育ったのかわかるまでには、教師が自分の人生を終えてしまっていることも珍しいことではない。しかし、これは長期目標あるいは生涯目標であって、短期目標は学生に求めることよりも、教師自らに求められることにあるように思う。

満6年が経過した理事は退任するというのが、本研究会の規約である。機関誌編集担当理事として、機関誌の第2巻を発行できたことを喜んでいる。ここにも、本研究会が軌道に乗ったことが示されていると思う。